

座長／東京医科歯科大学大学院運動器外科学／古賀英之  
／慶應義塾大学整形外科／原藤健吾

膝前十字靭帯（ACL）再建術は安定した臨床成績が報告されている一方で、スポーツ復帰後の再損傷の頻度が極めて高いことが知られており、再損傷を予防することは今後の大切な課題だと考えられる。本シンポジウムでは、古賀英之先生と筆者が座長を務め、シンポジストには当該分野でご活躍中の先生方にご登壇いただき、ACL 再損傷予防について議論した。第 30 回学術集会のメインテーマは、「Generation to generation 一次の世代へ」ということで、若手の先生にもご登壇いただいたこともあり、会場の聴講者はほぼ満員で、かつ多くの若い先生方も参加されていた。

## 1, ACL 再損傷の危険因子：木村由佳先生（弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座）

初回 ACL 再建術 453 例の調査から、再建靭帯損傷は 7.4%，対側損傷は 4.3% に生じていたと報告していただき、再損傷の危険因子に関しては、若年で活動性の高い症例、また ACL 損傷の家族歴が大切であるとご発表頂いた。

## 2, 動作解析から ACL 損傷予防を考える：浅枝諒先生（和歌山県立医科大学附属病院リハビリテーション部）

ACL 再建術後患者 22 名の片脚ジャンプの解析から、着地時膝外反角度に相関する因子として、身長、大腿脛骨角、受傷機転、性別が挙げられたことをご報告いただき、解剖学的な因子も考慮せざるを得ないこと指摘いただいた。

## 3, ACL 再損傷ハイリスク患者に対する前外側構成体補強術併用の試み：中川裕介先生（東京医科歯科大学整形外科）

東京医科歯科大学を中心とした多施設研究（TMDU MAKs study）から、術後 1 年での Pivot shift test の残存には、術前過伸展と Large pivot shift が関与していることが判明し、これらの患者に対しては初回 ACL 損傷においても BTB による ACL 再建に加えて前外側構成体の補強術を追加で施行していることをご報告いただいた。

## 4, ACL 再断裂予防のためのリハビリテーションと対側損傷予防について：大見頼一先生（日本鋼管病院リハビリテーション技術科）

ACL 再損傷を再建靭帯損傷と対側損傷に分けて考える必要があることを強調していただいた。再建靭帯損傷の予防としては Hip program を中心としたリハビリテーションの工夫とパンフレットを使用した患者教育で介入し、再断裂率は減少したと講演された。また、対側損傷を考慮するとスポーツ現場での予防プログラムを考慮する必要があること指摘いただいた。

## 5, ACL 再損傷予防の未来について：小林秀先生（慶應義塾大学整形外科）

ACL 再損傷を予防するためには、主観的および客観的評価および復帰時期などに基づいた適切な復帰の基準を設ける必要性があり、さらに安全なスポーツ復帰のために移植腱の成熟度を早め、かつ確実にする方法として再生医療の可能性をお話いただいた。

以上のご講演のあとにシンポジストの先生方と総合討論を行った。議論した内容としては、初回 ACL 再建術後のスポーツ復帰の基準や実際のスポーツ現場での予防に関する取り組みなどであった。会場の先生方からもいくつか質問をいただき、大変有意義なシンポジウムであった。

本シンポジウムでは ACL 再損傷予防をサイエンスする、ということで壮大なテーマを取り上げたが、シンポジストの先生方にご自身の経験や研究結果に基づいた最新の知見をご講演いただいたことで、この分野における日本の現在の立ち位置と今後の方向性を少しは示せたのではないかと感じている。